
英語教育における AI（人工知能）のリテラシー：学部共通コースの AI ポリシー と教育方法の確立へ

研究代表者 ホワイト ショーン アラン（経営学部）
共同研究者 メベッド シェリフ（法学部）
今村 潔（経営学部）
山岡 華菜子（経営学部）

はじめに

昨年度（2024 年度）の FD 研究開発プロジェクトでは、学部共通英語コミュニケーションコースにおける AI（人工知能）リテラシーの基盤づくりを目的として取り組んだ。具体的には、ChatGPT をはじめとする生成 AI ツールに関する情報収集・資料整備、語学学習プラットフォーム EnglishCentral の試験的導入と学生アンケートによる評価、ならびに英語コミュニケーションコースにおける AI 利用ポリシーの草案策定を行い、その基礎的なデータと知見を得た。

本年度（2025 年度、2 年目）のプロジェクトでは、こうした前年度の成果を踏まえ、主に二つの方向で取り組みを継続・発展させた。第一に、昨年度策定した AI 利用ポリシーの草案をさらに精査し、教員・学生からのフィードバックをもとに内容を改訂のうえ、2025 年度版学生ハンドブックに掲載した。第二に、授業内での AI ツール活用について、フリップトクラスルーム型授業、教科書内容とのテーマ連携、ゲーミフィケーションを含む協働活動など、より効果的な統合を図りながら実践を進めた。また、国内学会への参加を通じて最近の研究について学会で情報を集め、本プロジェクトの実践に活かした。

AI を活用した教育ツールの調査

本年度は、授業内での AI 活用をより効果的に進めるため、スマートフォンによるインタラクティブなクイズやゲーミフィケーションの要素を含む複数の教育用 AI ツールを調査・試用した。以下に主な対象ツールを示す。

- **ClassPoint** (<https://www.classpoint.io/>) : PowerPoint と連携したインタラクティブな授業用ツール。クイズやゲーミフィケーション機能を備え、授業内での即時フィードバックに活用できる。
- **MagicSchool AI** (<https://app.magicschool.ai/>) : テキスト・スライド生成、レッスンプラン、ワークシート、ゲーム活動を含む教員向け多機能プラットフォーム。
- **SchoolAI** (<https://schoolai.com/>) : 教員が設定したカスタムチャットボット（Sidekick）を学生に提供する学習支援ツール。学生とのチャット内容をモニタリングできる。
- **Eduaide AI** (<https://www.eduaide.ai/>) : ゲーム活動を含む多機能な教員向け教材生成プラットフォーム。
- **Curipod** (<https://curipod.com/>) : スライド・ワークシート・アクティビティを含む多機能教材作成ツール。
- **Wordwall** (<https://wordwall.net/>) : 教員提供コンテンツを使用したゲーム形式の学習活動作成ツール。
- **EdPuzzle** (<https://edpuzzle.com/>) : 教員提供コンテンツからインタラクティブな学習活動を生成するツール。

- **Quizlet** (<https://quizlet.com/>) : デジタルフラッシュカードおよびマッチングゲーム・テスト機能を備えた学習プラットフォーム。
- **Kahoot!** (<https://kahoot.com/>) : ゲーム形式のクイズプラットフォーム。
- **ChatGPT・Gemini・Copilot** などの主要 LLM の学習モード : AI がソクラテス式問答・クイズ・フラッシュカードを用いて学習内容の定着を支援するモード。

これらのツールは授業での使用可能性という観点から検討されたが、今年度は主に EnglishCentral の継続・発展的な活用を中心的な取り組みとし、上記ツールの本格的な授業内実装は今後の課題として引き続き検討していく。

学会参加

本年度は、全国語学教育学会コンピュータ支援言語学習研究部会主催 JALT CALL 2025 (2025 年 7 月) および同学会の年次大会 JALT 2025 (2025 年 10 月・11 月) の両学会に参加し、英語教育における AI 活用に関する最近の研究について情報を集めた。両学会を通じて確認された共通の主要テーマとして、AI ツールは有効な学習支援となりうる一方、その効果は AI リテラシーの基盤があって初めて発揮されること、AI を使った練習と使わない練習の両方を組み合わせることの重要性、そして人間同士のやり取りが言語・文化的発達において依然として不可欠であること、の 3 点が挙げられる。また、ゲーミフィケーションを取り入れた環境 (メタバースや課題ベースの活動など) が口頭コミュニケーション能力の向上に有効であること、AI によるフィードバック (ライティング・スピーキング双方) が学習意欲や自己評価能力の向上に寄与することも示された。一方、多くの発表が肯定的な成果を示しながらも、AI への過度な依存、批判的思考力の低下、言語の均質化といった懸念を付随的課題として言及するにとどまる傾向があり、確証バイアスの可能性にも留意が必要である。

これらの知見は、本 ECC プログラムの取り組みと直接関連している。EnglishCentral の MiMi チャットボットを用いた会話練習や AI フィードバックの活用は、AI を人間の学習を補完するツールとして位置付けるという学会での共通見解と合致する。また、ゲーミフィケーション要素を持つツールへの関心は、本年度の教育ツール調査における方向性とも一致する。学術的誠実性をめぐっては、AI を認知負荷軽減の有用なツールとして実用的に捉え、道徳的な善悪論に偏らず、透明性と学習効果を軸にした指導方針を取ることが、本コースの学生・文化的文脈に適していると考えられる。こうした学会での議論は、本プロジェクトにおける AI ポリシーの精査や次年度の授業実践の改善に継続に活かしていく。

EnglishCentral の継続・発展的活用

オーラル・コミュニケーション科目での活用

本年度は、昨年度に引き続きオーラル・コミュニケーション (OC) 科目において EnglishCentral を活用した。昨年度との主な変更点として、授業で扱うトピックと関連するビデオコンテンツを積極的に選定し、授業内容との連携をより直接的に図ることを試みた。具体的には、授業テーマに関連する動画を指定し、EnglishCentral が新たに提供するプリント教材 (ワークシートおよび語彙リスト) を授業内での視聴・グループワーク活動

に活用した。

【使用状況データ】

- 週平均学習時間：約 1.2 時間（目標 2 時間の 62%）、最低 34 分・最高 1 時間 43 分
- MiMi とのスピーキング AI チャット：学期合計平均 40 回（最低 15 回・最高 62 回）
- チャット所要時間（推定）：平均 3 時間以上（最低 1.25 時間・最高 5.16 時間）
- 昨年度の OC 科目受講生と比較して、エンゲージメントの向上が見られた。

Figure 1 : EnglishCentral のビデオ学習活動の例

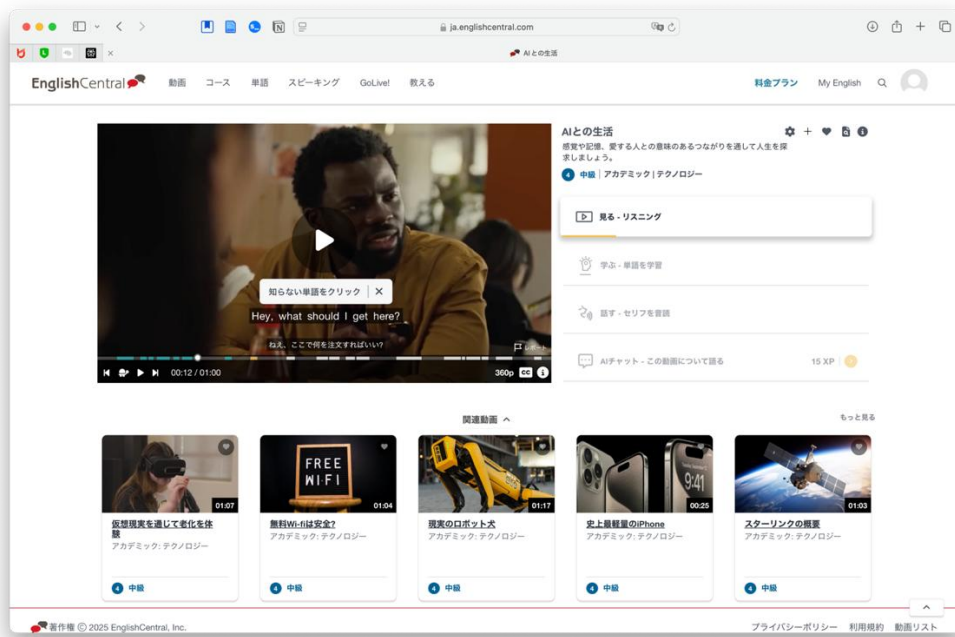
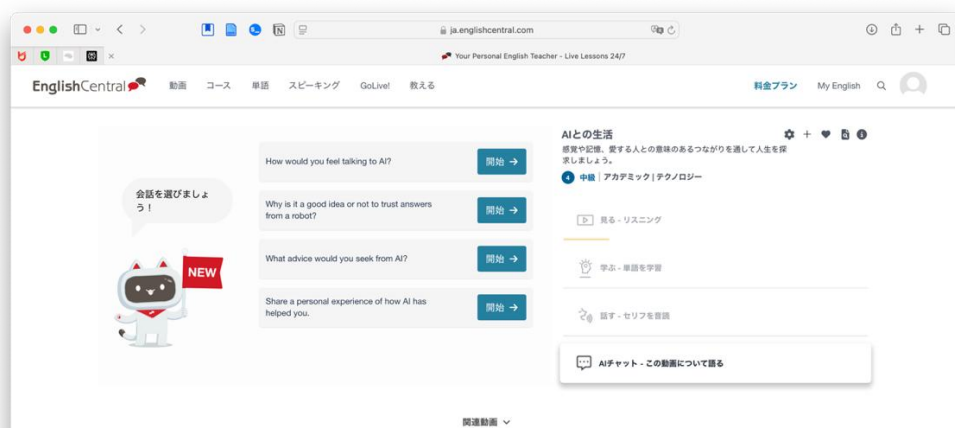


Figure 2 : EnglishCentral の動画ベース AI チャットボット「MiMi」との会話の例



他科目への展開

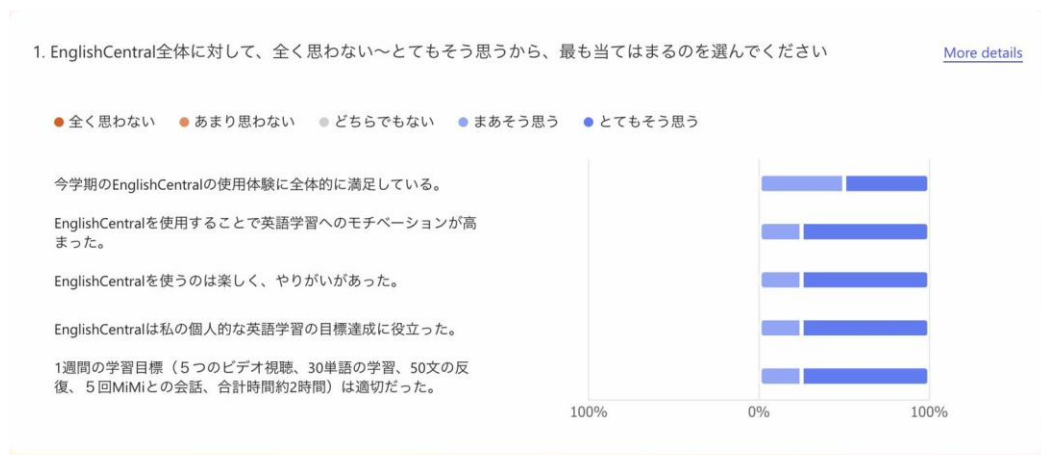
本年度は、OC 科目以外に「Global Understanding in English」および「Seminar」科

目にも EnglishCentral の活用を拡大した。これらの科目では、文化・異文化コミュニケーション・テクノロジー・創造性・協働をテーマとする動画コンテンツを授業の補助教材として活用し、語彙・表現学習および MiMi チャットボットを用いたコミュニケーション練習を取り入れた。ただし、これらの科目での使用状況は前年度の OC 科目と同程度にとどまり、OC 科目と比較してエンゲージメントは高くなかった。今後はこれらの科目における学生の使用促進に向けた働きかけが課題となる。

学生アンケート調査の結果

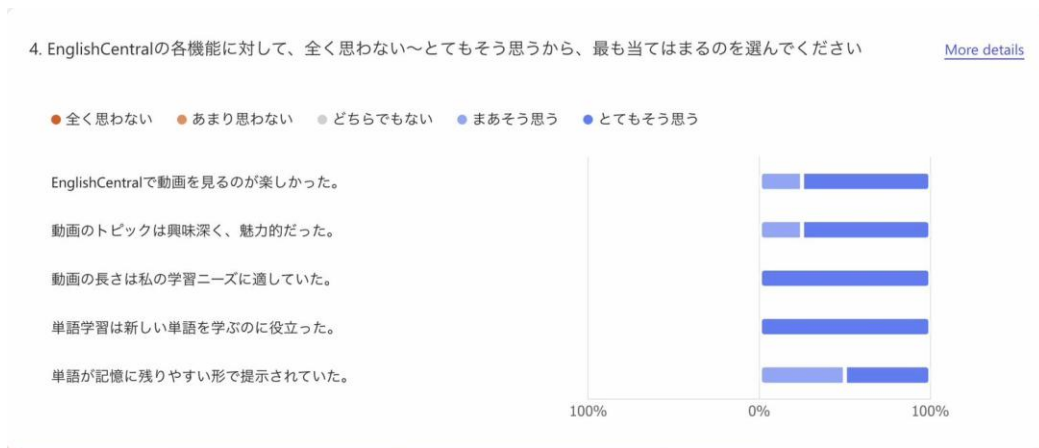
本年度も OC 科目受講生（15 名）を対象に、EnglishCentral に関するアンケート調査を実施した。設問形式・内容は前年度と同一とし、経年比較を可能とした。全体的な傾向として、前年度と比べて満足度およびエンゲージメントの向上があった。以下にアンケート結果を示す。

Figure 3 : EnglishCentral 全体的満足度に関するアンケート結果（OC 科目受講生）



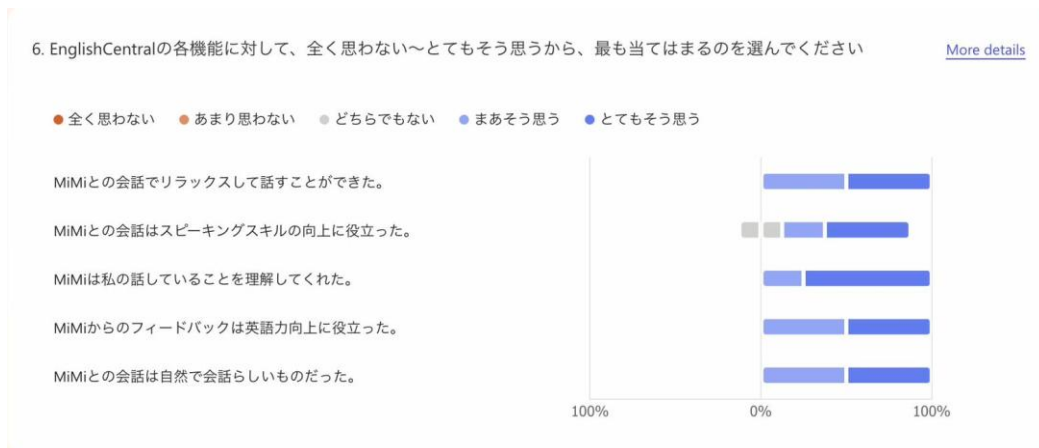
総合的な使用体験について、受講生の大多数が「まあそう思う」または「とても思う」と回答し、学習への動機づけ、楽しさ、個人的な学習目標への貢献について肯定的に評価した。1 週間の学習目標（5 本の動画視聴、30 単語の学習、50 文の反復、5 回の MiMi との会話、合計約 2 時間）についても概ね適切と評価された。

Figure 4: EnglishCentral 動画・語彙学習機能に関するアンケート結果 (0C 科目受講生)



動画・語彙学習機能については、動画視聴を楽しいと感じた学生が多く、トピックの面白さ・動画の長さ・語彙学習の有効性についていずれも高い評価が得られた。特に動画の長さが学習ニーズに適していると感じた学生が多く、短時間で集中的に学習できる形式が評価された。

Figure 5: MiMi AI チャットボット機能に関するアンケート結果 (0C 科目受講生)



MiMi チャットボット機能については、リラックスして話せると感じた学生が多く、スピーキングスキル向上への有効性についても肯定的に評価された。ただし、「スピーキングスキルの向上に役立った」の項目では若干のばらつきが見られ、「どちらでもない」や「あまり思わない」と回答した学生も一部いた。MiMi の理解度・フィードバックの有用性・会話の自然さについては概ね肯定的な評価であった。

以上の結果から、本年度も EnglishCentral は英語を聞いたり話したりする機会のための、AI を活用した補助的語学学習プラットフォームとして役に立っていたことがわかった。一方、アンケート設計の観点から、今年度の新たな活用方法（授業コンテンツとの連携、

プリント教材の活用など) に対応した設問を追加することができなかった点は反省点として残り、次年度のアンケート設計に活かす必要がある。

AI ポリシーの改訂および学生ハンドブックへの掲載

教員会議とポリシー草案の見直し

2025 年 6 月に、オーラル・コミュニケーション (OC) 科目担当教員およびライティング (WR) 科目担当教員とそれぞれ通常ミーティングを実施し、AI ポリシーの草案について協議した。各ミーティングでは、学生の AI 使用状況に関する情報共有とともに、ポリシー草案の内容について担当教員からフィードバックを得た。これらの意見を踏まえ、ポリシー草案の内容を精査し、表現の明確化や項目の整理を行うなど、軽微な改訂を加えた。

学生ハンドブックへの掲載

上記の改訂を経て、AI・翻訳ツールの利用に関するガイドラインを要約したより簡潔な版を作成し、2025 年 9 月に配布された英語コミュニケーションコース学生ハンドブック (2025-2026 年版) に掲載した。以下に掲載内容の要点を示す。

Figure 6 : 英語コミュニケーションコース学生ハンドブック (2025-2026 年版) AI ガイドライン追記

【剽窃・機械翻訳ツールについて】

インターネット上の情報出典を明示せずにコピーすること、他のソースからの文章をそのまま自分の成果物として提出することは禁止されている。また、まとまった分量の Google 翻訳・DeepL などの機械翻訳ツールの使用を、明示なしに自分の成果物として提出することも剽窃とみなされる。ただし、適切に活用した場合は言語学習の支援ツールとなりうる。

【AI・翻訳ツール利用ガイドライン (主要項目)】

- ・ 学術的誠実性：提出物はすべて自分自身のものとし、担当教員のポリシーに従うこと。AI 生成コンテンツを適切な明示なしに提出することは剽窃にあたる。
- ・ 透明性：AI ツールをいつ・どのように使用したかを明示すること。
- ・ 授業・課題での使用：特定の課題・授業活動における AI 使用については担当教員の指示に従い、不明な場合は確認すること。
- ・ 学習促進：AI は自分の思考や言語学習を補完するものであり、代替するものではない。AI が提供する情報は必ず確認すること。
- ・ 倫理的配慮：AI ツール使用時のデータプライバシーに注意し、情報の所有権に関する倫理基準に従うこと。

- ・ 責任ある使用：学術的誠実性を維持しながら倫理的・効果的に使用することで、AI は学習体験を豊かにすることができる。

【AI 使用の明示例（ハンドブック掲載）】

- ・ 脚注・文末注：「ChatGPT-5 を使用してトピックのブレインストーミングを行い、段落構成の修正案を得た後、自分で評価・取捨選択した。」
- ・ 本文内引用：「ChatGPT への質問（2025 年 7 月 15 日）によると、この問題の一つの解決策は…」
- ・ 方法の記述：「DeepL を使用して例文・専門用語を翻訳し、概念の理解を深めた上で自分のコンテンツを執筆した。」
- ・ 付録：使用したプロンプトと編集前の AI 回答を添付し、プロセスを示す。
- ・ 表紙への記載：「使用 AI ツール：校正に Grammarly、第 2 節のアイデア出しに ChatGPT」

本ガイドラインは、担当教員の指示を優先とした上で AI 利用に関する共通の枠組みを提供するものであり、詳細については担当教員またはコースの完全版ポリシーを参照するよう学生に案内している。

考察と今後の課題

本年度の成果と課題

本年度のプロジェクトでは、EnglishCentral の授業内容との連携強化、学会参加による最新知見の収集、AI ポリシーの改訂と学生ハンドブックへの掲載という三つのことができた。特に、OC 科目における EnglishCentral の使用状況は前年度を上回り、学生がより積極的に使っていたことは良い結果だった。

一方で、当初目指していたいくつかの取り組みは完了に至らなかった。学生および担当教員を対象とした AI 使用全般に関するアンケート調査については、時間的制約により実施できなかった。秋学期に予定していた教員対象のワークショップについても、スケジュール調整の困難から実施に至らなかった。これらを踏まえ、AI ポリシーの最終版策定は次年度に持ち越しとなった。また、EnglishCentral 以外の AI 教育ツールについては、調査・試用の段階にとどまり、本格的な授業内実装には至らなかった。

次年度（3 年目）の計画

次年度は以下の取り組みを予定している。

- ・ AI 学習ツールの調査・授業実装を継続し、各ツールの適切性・有効性を検証する。
- ・ 学生および担当教員を対象とした AI 使用全般に関するアンケート調査を実施する。

- 担当教員対象のワークショップ・会議を計画通り実施する。
- 教員・学生からのフィードバックを踏まえ、AI ポリシーの最終版を策定する。

生成 AI ツールは急速に進化し続けており、教育現場への影響は今後もますます大きくなると予想される。3 年目となる次年度は、今年度実施できなかったアンケート調査とワークショップを優先し、ポリシーの最終版策定を目指す。EnglishCentral 以外のツールの授業実装にも着手したい。